

真宗文庫

親鸞の仏道  
—『教行信証』の世界—

寺川俊昭

東本願寺出版

真宗文庫

---

# 親鸞の仏道

—『教行信証』の世界—

寺川俊昭



---

東本願寺出版



●はじめに ..... 9

●第一章 「後序」に学ぶ ..... 15

一 親鸞の時代認識 16

二 『教行信証』製作の事由 26

三 よき人との出遇い 29

四 承元の法難 36

五 嘉禄の法難 51

六 『教行信証』製作に込められた願い 57

七 大乘の論師 66

◎第二章 「教卷」に学ぶ

.....73

- 一 浄土真宗の大綱 74
- 二 二種の回向 81
- 三 真実の教え 87
- 四 积尊と法然 92
- 五 本師 98
- 六 出世本懐の満足 110
- 七 值遇感 120
- 八 『大無量寿経』の大意 123
- 九 二尊教 135

●第三章 「行巻」に学ぶ

- 一 本願の名号 158
- 二 浄土の開示 162
- 三 浄土をもった人生 169
- 四 無碍光如来の名を称す 178
- 五 真如一実の功德 200
- 六 大悲の願 211
- 七 帰命と願生 217
- 八 本願招喚の勅命 224
- 九 本願の行 236
- 一〇 金剛心の成就 240
- 一一 現生十種の益 246

一二 不退の位に立つ 261

一三 誓願一仏乘 267

●あとがき ..... 285

文庫化にあたって 288

本書は、二〇一一年に真宗大谷派（東本願寺）の「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌」を記念して出版された『シリーズ親鸞』全十卷（筑摩書房刊）より、第四卷『親鸞の仏道―『教行信証』の世界』を文庫化したものです。



## 凡例

\*本文中、史資料の引用については、基本的に東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行『真宗聖典』を使用した。

\*『真宗聖典』収録以外の引用については、『真宗聖教全書』（大八木興文堂）、『親鸞聖人行実』（真宗大谷派教学研究所編）、『日本思想大系』（岩波書店）、『真宗史料集成』（同朋舎出版）などに依拠した。

\*本書の引用文については、読みやすさを考慮して、漢文を書き下し文に、文字の一部をかなに改め、新字新かなを用いた。また、適宜ルビを施した。

## はじめに

### 『教行信証』とは

現在、親鸞聖人の信仰に、あるいは思想に心惹かれる人は、多くの場合、『歎異抄』によってその内面に尋ね入ろうとします。『歎異抄』は親鸞の語録ですから、いわば、素顔の親鸞聖人、対話の場で自分の信念を卒直に吐露した聖人の面影が、伝えられています。

しかし今回この本では、聖人の語録である『歎異抄』ではなく、親鸞聖人その人が生涯の長い期間をかけて練りに練った思索を自ら書き記した、畢生の書である『教行信証』によって親鸞の思想と信念とを尋ねます。『教行信証』を尋ねるということは、『歎異抄』とは多少違って、いわば姿勢を正して「わが信念」を語っている、しかも壮大なスケールで思想的に自らの信念を語ってい

る、そういう親鸞の面目に触れていくことになると思います。

最初に、『教行信証』の構成を簡単に見ておきます。普通『教行信証』と呼んでいるこの本は、正式の題名は『顕浄土真実教行証文類』と言い、内容は六卷から成ります。

総序（顕浄土真実教行証文類序）

顕浄土真実教文類一 教卷

顕浄土真実行文類二 行卷

別序（顕浄土真実信文類序）

顕浄土真実信文類三 信卷

顕浄土真実証文類四 証卷

顕浄土真仏土文類五 真仏土卷

顕浄土方便化身土文類六 化身土卷

後序（「化身土卷」の跋文）

## 『教行信証』を読むにあたって

『教行信証』を尋ねるにあたって、確認すべきことを三点ほどあげておきます。第一に、『教行信証』の構造についてです。曾我量深という方は、「教巻」「行巻」二巻を「伝承の巻」、「信巻」以下を「已証の巻」と了解しました。「伝承の巻」では、親鸞が帰入した伝統の仏教、親鸞がそれに因縁を結び、大きな讃嘆と共に仰いだ仏教の内実が表白され、顕揚されています。それに対して「已証の巻」は、この伝承の仏法をどのように主体化していくか、伝統の仏法をどのようにわが信念として内面化し、了解し、身につけていくかを基本的な課題にしています。

今回は、その「伝承の巻」に依りながら、親鸞が仏教をどのようなものとして仰ぎ、表白したのかを尋ねていきたいと考えています。ですから、この六巻の中で今回直接取り上げるのは、初めの「教巻」「行巻」の二巻と、「化身土巻」の跋文Ⅱ「後序」の三つです。

「正信偈」は、「帰命無量寿如来 南無不可思議光……」に始まり、真宗の寺院であれ、門徒の家庭であれ、一番大切にし、毎日の勤行に用いる讃歌です。この讃歌は、「行巻」の最後に置かれ、「伝承の巻」を締めくくるような内容をもっていきます。「正信偈」は正しくは「正信念仏偈」と言います。正信の偈、すなわち信心の讃歌をもって「伝承の巻」の叙述を結んでいます。ですから「教」「行」二巻は、ただ単に親鸞の仏教における教と行とだけを述べるものではありません。親鸞が大きな讃嘆の中に仰ぎ、帰依し、それに依って生きた浄土真宗という仏道の全体が堂々と表白され、顕揚されているのです。『教行信証』のこの部分をテキストにして、浄土真宗の内実、すなわち親鸞の信仰と思想、もしくはは精神生活の、内面を尋ねていきたいと思うことです。

第二に、この『教行信証』は、ずいぶん幅広い読み方ができる本である、ということです。一般の理解では、この本は真宗の教義を、一つの整然とした体系として述べたものだと言われています。しかし今回は、私はそういう関心に立ってではなく、親鸞における仏教者としての信念の吐露、浄土真宗なる信念

の叫びをあえてこの本から聞き取っていききたい。こういう課題と関心をもつて、読んでいきたいと思っています。そして実はこのことが、私の『教行信証』理解の基本的関心でもあるのです。この本は、漢文で書かれています。ですから、表現する言葉は固いです。しかし、内容が固いというわけではありません。生き生きとした親鸞の信念が、端的に、堂々と、時に深刻に、表白され、吐露され、断言され、また宣言されています。それを柔軟に読み取ることが、親鸞に向き合う場合大切であると思います。

そして第三に、「教巻」に入る前に、まず「後序」を尋ねていく、ということとです。この部分は、親鸞自身が「後序」と名付けているのではなく、「化身土巻」の末巻跋文にあたる部分を、内容から、いわゆる「後序」と呼んでいます。この「後序」によって、われわれは『教行信証』の基本的性格を的確に知ることができます。よく知られているように、親鸞はその数多くの著作にもかかわらず、自分の行実についてはほとんど書き記すことのなかった人です。しかしこの「後序」には、日付まであげて、親鸞の生涯における最大事件であっ

た法然との出遇いを感慨深く記しています。

また、同じように親鸞の運命を変えた、法然の仏教運動に対する厳しい弾圧であった承元の法難についても、激しい感情をこめて記しています。この「後序」によって、われわれは『教行信証』が如何なる状況の中で書かれたのかということを、親鸞の自覚的把握に即して具体的に知ることができます。「後序」は、この本を教義の体系書だとする理解を突破する、その立脚地を持つことができる一つの依り処となるのです。ですから、私はこの「後序」をできるだけ大切に読んでいかなければ、『教行信証』の積極的性格を、十分に了解することはできないと思っています。

以上のような検討のもとに、親鸞聖人の仏道が堂々と、表白、開顕されている『教行信証』の世界を尋ねていきたいと思えます

第一章 「後序」に学ぶ



## 一 親鸞の時代認識

### 『末法燈明記』の歴史感覚

「後序」に入る前に、親鸞が『教行信証』の中にそのほぼ全文を引いている、伝教大師の書かれたと言われる『末法燈明記』という文章を尋ねます。私たちが生きる時代が、どのような時代であるのか、そのことを凝視することの大切さを語っているからです。ひどく荒廃した人間生活。釈尊とか求道と言っただけで何か白けてくる虚無感。人間が生きる意味を問うこと、つまり人が生きていく上にもつ求道心に対する尊敬の喪失。そういう形で人間生活が荒れてくる厳しい状況を、釈尊の教えのいのちが衰え、消えていくという形で捉え、それを末法という言葉で表すのでしよう。

この末法の世に、人間がどんなに荒れ果てていくかを浮き彫りにするという意味が、『末法燈明記』の名に表れています。これを引用するところに、親鸞

の鋭い歴史感覚と現実認識の眼が託されています。時代を末法の世だと捉える醒めた眼が、親鸞には強くあります。人間が荒れていく。まともな人間生活ができる、そんなことは夢でしかない。生きている人間の現実をよく凝視して、そこから眼を離さないリアリストの眼。この醒めた歴史感覚が親鸞の特徴です。

この『末法燈明記』を見ると、そこには実に痛烈な記述があります。末法の世になると、仏弟子である者さえもが、見るに耐えない姿をさらしている。

人 将<sup>しようらいまつせ</sup>来<sup>らいまつせ</sup>末<sup>まつせ</sup>世<sup>せ</sup>に法<sup>ほつ</sup>尽<sup>じん</sup>きんとせん<sup>なん</sup>に垂<sup>な</sup>んとして、正<sup>まさ</sup>しく妻<sup>め</sup>を蓄<sup>たくわ</sup>え子を狭<sup>わ</sup>ましめ

て、かの酒家<sup>しゆけ</sup>より酒家<sup>しゆけ</sup>に至<sup>いた</sup>らん、我が法<sup>ほつ</sup>の中<sup>ちゆう</sup>において非<sup>ひ</sup>梵<sup>ぼん</sup>行<sup>ぎやう</sup>を作<sup>な</sup>さん。

将<sup>しようらいまつせ</sup>来<sup>らいまつせ</sup>世<sup>せ</sup>において法<sup>ほつ</sup>滅<sup>めつ</sup>尽<sup>じん</sup>せんとせん時<sup>とき</sup>、当<sup>まさ</sup>に比<sup>ひ</sup>丘<sup>きゆう</sup>・比<sup>ひ</sup>丘<sup>きゆう</sup>尼<sup>に</sup>ありて我<sup>わ</sup>が法<sup>ほつ</sup>の中<sup>ちゆう</sup>において出家<sup>しゆけ</sup>を得<sup>え</sup>たらんもの、己<sup>おのれ</sup>が手<sup>て</sup>に児<sup>こ</sup>の臂<sup>ひじ</sup>を牽<sup>ひ</sup>ききて、共<sup>とも</sup>に遊<sup>ゆ</sup>行<sup>ぎやう</sup>して、かの酒家<sup>しゆけ</sup>より酒家<sup>しゆけ</sup>に至<sup>いた</sup>らん、我が法<sup>ほつ</sup>の中<sup>ちゆう</sup>において非<sup>ひ</sup>梵<sup>ぼん</sup>行<sup>ぎやう</sup>を作<sup>な</sup>さん。

伝教大師は經典を引いてこんな描写をされていますが、あるいはこれが平安  
仏教の現実の一端であったのかも知れません。沙門の姿を保ちつつも、沙門の  
行を汚して沙門と称する人々が続出する。考えるまでもなく、私なども頭の上  
げようのないところではあります。私たちもごく普通に、妻や子と一緒に食事に行くこ  
とがあります。レストランかどこかへ行つて食事する。一家団欒の極めて和や  
かな情景です。だがその際、私が袈裟・衣でいたらどうであろうか。形の上で  
僧侶の端くれの姿を示していたらどうであろうか。この同じ姿を伝教大師は、  
妻を蓄え子をわきば狭み、沙門の姿をして酒家より酒家へ飲み歩く者がいる。涙なく  
してこれが見られるかと、痛んでいるではありませんか。

ここまで仏弟子と称する者の生活が荒廃している。なるほど、かつては持戒  
があつたらう。しかしやがて破戒、そして無戒。戒というようなものは、頭か  
ら感覚としてももう分からなくなっている。結婚は当然だ。僧侶であろうと人間

ではないかと開き直る。これが無戒です。親鸞の時代認識は、現代に生きる私たちが振りかざす常識、当たり前だと疑われない権利意識にも、鋭い疑問を投げかけているのです。

### 仏弟子の生き様

持戒、破戒、やがて無戒。こういうふうには荒廃していく仏弟子の生き様を、親鸞はよく見ていたのではないのでしょうか。末法の世、夢みることでできない厳しい現実があるわけです。その中で、仏教者は仏教者らしく生きよ、こう言う人ももちろんあります。「あるべきようは」と語った明恵上人などはその代表です。仏弟子らしくせよと。これは要するに戒律復興です。戒律を守る厳粛な修道生活を取り戻さないと仏教は駄目になると、真面目に叫ぶのが明恵上人です。

しかし親鸞は、それは真面目だけれども、実は時代錯誤だと見たのではない

でしようか。正法、釈尊の在世の時代と違い、釈尊の名が軽蔑され、反感を買うような時代に、われわれは生きている。その状況の中で持戒の修道生活を叫ぶのは、時代錯誤か、そうでなければ虚偽である。あるのは無戒の慘憺たる現実だけであり、その無戒の現実の中に、沙門の姿をなお保っている。この事実のもつ厳粛な意味をよくよく尋ねよ。『末法燈明記』はあえてこのように語ります。「無戒名字の比丘」、保つべき戒もはや失って、ただ名だけの比丘、形だけの出家、これが続出している。これを単に歎くのではなく、末法の「世の真宝」だと言うのです。

『末法燈明記』の文をあえて引く親鸞の胸中を、われわれはよくよく尋ねるべきではないでしょうか。釈尊以来の厳粛な修道生活という内容は失われたけれども、この形がある限りなお、世にあつて本当に大切なことがここに示されている。つまり自分の生活を照らして、真剣に真実を求める生活をしなければならぬという厳粛な求道を促す縁が、ここにある。形だけの僧侶であっても、仏教がここにあるということを示す役割は、決して消え果ててはいない。こう

言っているのではないでしょうか。

### 無戒名字の比丘

親鸞はこの文章にとっても共感しています。身は妻子をもって生きる。恥ずべく傷むべき、非僧非俗の沙弥の身です。けれども『末法燈明記』によるならば、末法という時代の現実がある限り、なお非僧非俗の身として末法の世を生きる者は、仏法をこの世に証しするという大きな責任が託され、願われているのだ。こういうふうに着実に、身の現実を捉えていったのではなかったでしょう。そこから、無戒名字の比丘という言葉に、親鸞は自分の襟を正して生きていくべき姿を仰ぐのです。伝教大師の『末法燈明記』に照らされて、親鸞が改めて身に感じた仏弟子の身にかけられた大きな責任。無戒名字の仏弟子の身に改めて自覚される、厳粛な責任。身の現実を結婚して妻子をもった破戒の身に動く、末法の世の仏弟子の責任＝痛み。これを親鸞は新たにしたので

す。無戒名字の比丘という言葉に、親鸞はそういうものを改めて感じていったのです。その辺りから、自分の結婚生活等を省みて、「愛欲の広海に沈没して」とか「恥ずべし、傷むべし」と自らの姿を告白しているのではないのでしょうか。

この無戒名字の比丘の姿を、親鸞が生きた時代の日本の状況の中でより具体的に表すと非僧非俗の沙弥となるのだろうと思います。親鸞は自らを、進んで比丘と名のるのではなく、『末法燈明記』の言葉を謹んで聞いているのです。こう捉えると、むしろここにはある意味での決着があります。つまり安らぎがそこにあります。このようにしか私は生きていけないのだ。妻子をもったこの生き様で、自分は人間としての業を果たしていくのだという安らぎが感じられます。

## 「愚禿釈親鸞」の名のり

こういうような無戒名字の比丘と非僧非俗の者という重層的な自覚が、『教行信証』を書くときの「愚禿釈親鸞」という自らの名のりにおいて、禿とくの一字に託されています。親鸞という人は、一所懸命に一日一日を生きていく。そこに感じられるさまざまな思いを、先師の厳しい言葉に照らし、あるいは周辺に生きている沢山の生活者の姿に照らして、自分は一体何者なのか、自分は一体何者として生きようとするのかを、繰り返し自分に問うていったに違いありません。その中から、愚禿、すなわち愚かな非僧非俗の沙弥であるままに、しかも仏弟子とされた親鸞、こういう痛みと、責任感と、安らぎと、信念とが、複雑に動いているあの「愚禿釈親鸞」という名のりが、生まれてきたのであろうと了解するのです。

同時に、この禿に、愚という言葉がつけられています。愚かな禿人。このことがまた、親鸞は正直な人、リアリストだと思わせることです。自分を正当化



したり、夢みたりしないで、生身をもち妻子をもち、けれどもそのまま仏弟子とされたという信念をもって生きている自分をよく見ています。この愚とついていく材料は、否定しようもなく家庭生活にあったと、私には思われてきます。家庭をもつて暮していく中で、人間であることの愚かさというものに気づかないことはあり得ません。例えば愚痴、この大変に人間臭い行為があります。家庭という、戒律においてまさに厭離すべき場所に身を置けば、それがどれほど愚痴の強力な縁になることか。

あの戒律を守って厳しい宗教生活を生きている法然も自らのことを「愚痴の法然房」と表白しました。世間の人は「智慧第一の法然房」と、尊敬を込めて呼んでいたあの法然が、自己を語る時にはいつもこのように告白をしていたと伝えるのです。法然が師と仰いだ中国の善導大師も、「我等愚痴身」と表白しています。親鸞が出遇い、大きな尊敬を捧げた祖師たちが、「愚痴の法然房」と言い、「我等愚痴身」と自己告白している。このお二人にあるのは、非常に厳しい戒律を守っての宗教生活です。善導大師などは、「半金色の聖者」とい

う言葉を、当時つまり八世紀の長安の人が大師に捧げたほどの聖僧なのです。その善導大師が「我ら愚痴の身」と告白され、真宗興隆の大祖源空法師は「愚痴の法然房」と自己告白をなさっている。これは、私たちが仏教を学ぶときにとっても大切に厳粛な表白ではないでしょうか。

私たちも家庭生活を送ってみれば、人間が愚痴の身に帰らざるを得ない場面が続出します。たまたま愚かだというのではなく、愚かな者としてしか生きていけないのだという、自覚的な眼を賜たまわることです。そこに表白されたのが、愚なる禿人。けれども師の教えに値遇することの恩恵として賜たまわった本願の信、それによって愚なる禿のままに仏弟子とされた。このような実感と自覚とを託しつつ、愚禿なる釈の親鸞、このように名のる一人の仏者として、親鸞は群萌の真っ只中に、自分の生きる場所を確かに見定めたのです。そして群萌とし雑草として、石・瓦かわら・礫つがの如く生きる同時代の生活者を、友とし同朋として仏道を生き、浄土の道を生きようとする。こういう大きな願いという形で、親鸞が獲た信心が生きられていったのです。如来に助けられてありがたい、ここに立